

# 獨協医学会

会 長 吉田 謙一郎 (獨協医科大学 学長)

## 運 営 委 員

千種 雄一*	石光 俊彦**	朝戸 裕貴	板垣 昭代	稲葉未知世
尾関 祐二	黒須 明	国分 則人	小嶋 英史	酒井 良彦
桑島 成子	志水 太郎	西山 緑	濱口 眞輔	深美 悟
増田 道明	松島 久雄	緑川由紀夫	森田 公夫	矢澤 卓也
安士 正裕	吉原 重美			

\*委員長 \*\*副委員長

## Dokkyo Journal of Medical Sciences 編集委員

石光 俊彦*	矢澤 卓也**	稲葉未知世	黒須 明
坂本 攝	濱口 眞輔	安士 正裕	吉原 重美

\*委員長 \*\*副委員長

## Dokkyo Journal of Medical Sciences 編集事務員

松本智恵子

## 編 集 後 記

Dokkyo Journal of Medical Sciences Vol. 45, No. 3 (獨協医学会雑誌 45 巻 3 号) をお届けいたします。本号には、原著 (英文) 1 編、原著 (和文) 1 編、症例報告 (和文) 1 編が掲載されております。また特集につきましては「臓器移植、人工臓器、再生医療の現況」と題して 9 編が掲載されています。論文をご投稿いただきました著者の先生方をはじめ、日頃より獨協医学会の活動に多大なるご支援をいただいております関係各位、会員の皆様には、心より御礼を申し上げます。

臓器移植および人工臓器の開発といった医学研究の進歩は臓器機能不全を患う人に福音をもたらし、2006 年に京都大学の山中伸弥先生らにより報告された iPS 細胞作成法の発見は、再生医療を飛躍的に進歩させました。また、癌治療の分野においても、京都大学の本庶 佑先生らによる PD-1 の発見、および PD-1-PD-L1 pathway の遮断による新たな治療法の開発は、これまで第 4 の癌治療法に甘んじていた癌免疫療法の立ち位置を大きく押し上げ、本庶先生は今年度のノーベル医学生理学賞を受賞されました。会員の皆様におかれましては、日本人医学研究者がこれらの偉業を成し遂げたことに、同じ日本人として誇らしく感じていらっしゃると思います。私も微力ながらこれまで癌細胞が宿主免疫監視機構を逃れるメカニズムについて研究してきたことから、PD-1-PD-L1 pathway 遮断薬がスピーディーに臨床現場で使用可能となり、また癌薬物療法の 1st line としても使用可能になったことに、まるで自分が成し遂げたことのような感動を抱いております。

近年ノーベル賞を受賞した日本人研究者の方々のみなら

ず、彼らの偉業を称える研究者の方々が異口同音に仰っていることがあります。それは日本という国が教育にかける公的資金は OECD 加盟国中で最低であること、そして自然科学研究費もアメリカや中国に大きく差をつけられていることです。ノーベル賞級とは言わないまでも、研究成果が実臨床レベルに還元されるようになるまでには 10~20 年かかることは良く聞く話であり、また昨今の研究には内容だけでなく迅速性も求められている現状において、日本が今後も世界をリードする研究成果を挙げていくためには、絶え間なく教育研究に理解を示していくというスタンス、つまり懐の深い教育研究環境が必要不可欠ではないかと思われまふ。幸いにも獨協医科大学には都会の喧騒からやや離れた落ち着いた生活環境があり、また学内には何事にも集中して取り組める学園環境が整備されています。本庶先生も報道番組のインタビューで仰られていた「自分の目で確かめるまで、本に書かれていることは信用しない」、「なぜなんだろう? と思ったら、答えが見つかるまで追求し続ける」といった姿勢は、基礎研究だけでなく、臨床研究にも、また日常の臨床においても重要なことであろうかと思ひます。獨協人それぞれが、自分らしいリサーチマインドを持って日々を過ごす……。きっと輝かしい未来が獨協医科大学に創生されていくのではないでしょう

か。獨協医学会、そして獨協医学会誌のさらなる発展のため、今後もより一層のご支援、ご高配を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

(矢澤卓也)

2018年10月20日印刷

第45巻 第3号

2018年10月25日発行

編集発行人

獨協医学会

吉田 謙一郎

発行所

獨協医学会

〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880番地  
獨協医科大学

Tel (0282) 87-2484 (内線2009)

製 作

教 文 堂

〒162-0804 東京都新宿区中里町27

Tel (03) 3260-6136